

跪死

驚恐地震、失神而死、供祭所司觸此穢也、

〔平家物語六〕入道せいきよの事

入道相國○平清盛やまひつき給へる日よりして、ゆ水ものどへ入られず、身の内のあつき事は、火をたくがごとし、○中あまりのたえがたさにや、ひえい山より、千手井の水をくみ下し、石の舟にた

へ、それにおりてひえ給へば、水おびた、しうわきあがつて、ほどなく湯にぞなりにける、○中同じき○治承五年閏二月四日の日、かんせつひやくぢして、つゐにあつち死○あつち死、長門本平家物語作あつち死、源平盛衰記作周にぞし給ひける、

〔太平記二十六〕楠正行最期事

大剛ノ者ニ睨マレテ、湯淺臆シテヤ有ケン、其日ヨリ病付テ身心惱亂シケルガ、仰ゲバ和田ガ忿タル顔天ニ見へ、俯ケバ新發意ガ睨メル眼地ニ見へテ、怨靈五體ヲ責シカバ、軍散ジテ七日ト申ニ、湯淺アガキ死ニゾ死ニケル、

慟哭而死

〔日本書紀六〕九十九年七月戊午朔、天皇崩於纏向宮、明年三月壬午、田道間守於是泣悲歎之曰、

○中今天皇既崩不得復命、臣雖生之亦何益矣、乃向天皇之陵、叫哭而自死之、群臣聞皆流淚也、

〔日本書紀十五〕元年十月辛丑、葬大泊瀬天皇、○雄于丹比高鷲原陵、于時隼人晝夜哀號、陵側與食不喫、七日而死、有司造墓陵北、以禮葬之、

絶食而死

〔吾妻鏡六〕文治二年七月廿五日庚子、大夫尉伊勢守平盛國入道、去年被召下、被預岡崎平四郎義實三浦

介義明之處、日夜無言、常向法華經、而此間斷食、今日遂以歸泉、二品○源賴朝令聞之、給心中尤可耻之由、

被仰云云、○中今年七十四云云、

〔近世畸人傳二〕小野寺秀和妻附秀和姉秀和詠歌

赤穂義士小野寺十内秀和妻丹子は、灰方氏の女也、○中秀和同息秀富幸右衛門自盡を賜へる後、